別紙１

１．日本脳炎とは

日本脳炎ウイルスの感染でおこります。ヒトから直接ではなくブタなどの体内で増えたウイルスが蚊によって媒介され感染します。7～10 日の潜伏期間の後、高熱、頭痛、嘔吐（おうと）、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になります。ヒトからヒトへの感染はありません。

流行は西日本地域が中心ですがウイルスは北海道など一部を除く日本全体に分布しています。飼育されているブタにおける日本脳炎の流行は毎年 6 月から 10 月まで続きますが、この間に地域によっては約８０％以上のブタが感染しています。以前は小児、学童に発生していましたが、予防接種の普及などで減少し、最近では予防接種を受けていない高齢者を中心に患者が発生しています。

感染者のうち 100～1000 人に１人が脳炎を発症しますが、髄膜炎や夏かぜのような症状で終わる人もいます。脳炎にかかった時の死亡率は約 20～40％ですが、神経の後遺症を残す人も多くいます。

２．乾燥細胞培養日本脳炎ワクチン（不活化ワクチン）とは

ベロという細胞でウイルスを増殖させ、ホルマリンなどでウイルスを殺し（不活化）、精製したものです。

３．副反応

発熱、接種局所の発赤・腫脹（はれ）、しこり、発疹などが比較的高い頻度（数％から数十％）で認められます。通常、数日以内に自然に治るので心配の必要はありません。接種局所のひどいはれ、高熱、ひきつけ等の症状があったら、医師の診察を受けて下さい。

４．予防接種を受けることができない人

１　明らかに熱のある人（通常 37.5℃以上をいいます。）
２　重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
３　その日に受ける予防接種の接種液に含まれる成分で、アナフィラキシーを起こしたことがある人
４　麻しん、風しん、みずぼうそう、おたふく風邪などにかかって１ヶ月を経過していない人
５　その他、医師が不適当な状態と判断した場合

～『予防接種と子どもの健康』より～